

大学教育の総合評価

その4 在学生・卒業生・教職員による学生生活の評価の比較研究

原 一 雄
中 山 和 彦
星 野 悠 子
岩 瀬 純 一
土 屋 静 子

1. はしがき

1967年夏、国際基督教大学（以下ICUと略称）教育心理学研究室に集った著者たちは、大学紛争直後の学園を一刻も早く再建させたいものと希いつつ、「大学教育の総合評価」に関する方法論と実施の際の具態的計画について論じ合った。そして評価対象の一つである「学生生活」について、早速一連の共同研究を試み、結果を発表してきた。すなわち、下記の諸報告がそれである。

教育評価の意義と方法、ならびにICUのための試案(1)

在学生による学生生活の評価(2), (3)

卒業生による学生生活の評価(4), (5)

教職員による学生生活の評価(6)

不幸にしてこの調査の後、ICUは再度の学園紛争を体験した。そこでこれらの論文に報告された諸資料は、現状の分析にはあまりにも古きに失するの謗を免れない。しかしながら、今ICUは新学長を迎え、献学の精神を更めて確認し合いながら、今日の厳しい社会状況の中で各自がそれぞれ奉仕の途を歩まんと志している。この時に当り著者一同は、われわれの共同研究の最後の締めくくりとして、今までに得られた結果を相互に比較検討し、今後

の大学教育の在り方にいささかでも参考になるような資料を提供したいと考えた。このことが共同体の一員として筆者たちの責務であると信ずると共に、われわれはこの協同作業に参加し得たことを衷心より喜びとする次第である。

2. 研究の目的

価値の多様化、分極化の時代と称せられる現代において、いかなる集団と言えども構成員の間に認知的協和、感情的同化、行為の同調を望むことはなかなか容易でない。同時に個人にとっても、人格形成の過程の中に価値観の理性的、情緒的、意志的統合を求めることは極めて困難である。このような現代社会において、基督教的信条と人道主義に根ざしたICUの教育理念を希求し実践することは実に至難の業であり、またそれだけに挑戦しがいのある大命題である。

本調査研究は大学教育の一側面である学生生活を取りあげ、ICU人がいかにこの課題に対処し解決の糸口を見い出すか、次のような価値志向と欲求不満の動因分析を試みる。すなわち、本研究の目的は、

大学共同体の主要な構成員である在学生、卒業生、教職員が学生生活をいかに評価しているか、三群間における価値意識の共通点と相違点を調査する。また価値志向の目標と現状認知の差から生ずる葛藤を分析し、集団間ならびに個人内に存在する心理的緊張を診断する。以上の比較研究を一つの試金石として、大学教育の力動性の要因を明確にし、構成員の参加による総合評価の可能性を吟味検討する。

3. 方 法

A. 被調査者と調査時期

ICU教養学部在学生197名、卒業生133名、教職員27名がこの調査に協力した。在学生群は1967年10月、教養学部にて在籍中の日本人学生1119名中の

約18%に当り，卒業生群は1968年11月，ICUに勤務していた50名中の37名とその他調査を依頼した卒業生 253 名中の96名で，回答者は依頼者の40%に相当し，教職員群は1967年11月，無差別に抽出した 100 名の教員ならびに教育職員中の27%の回答者より構成されている。なお各群の成員の内分けについては，前記各論文に詳細が述べられているので，ここでは省略する。

B. 質問紙

総ての被調査群に対し，「学生生活に関する態度調査」用の質問紙(2)を使用した。質問項目は下記の領域にまたがる総計 121 項目からなりたっている。

(表 1,2 参照)

第 1 領域	第 2～8 領域を抽象的に表現する項目 (11項目)	
第 2 領域	教科活動	(30項目)
第 3 領域	課外活動	(22項目)
第 4 領域	学校行事	(12項目)
第 5 領域	制度・特色	(11項目)
第 6 領域	設備・施設	(13項目)
第 7 領域	文化的環境	(6 項目)
第 8 領域	日常生活	(16項目)

全項目について，先ず「学生生活を送るうえに大切なものかどうか」，次に「現在満足すべき状態にあるかどうか」を問い，5段階の評定尺度の上にそれぞれの回答を求めた。尺度に用いた評価規準は次の通りである。

+ 2	極めて大切，	極めて満足
+ 1	大切，	満足
0	どちらでもない，	どちらでもない
- 1	大切でない，	不満足
- 2	全く大切でない，	甚だ不満足

C. 整理方法

各項目につき5段階評定をそのまま「大切さ」と「満足度」の評価得点とした。次にこれら両得点の差を求め、「(欲求)不満足」とした。よって正の値は不満度の高いことを、また負の値は充足度の高いことを表わす。

各被調査群毎にそれぞれの項目について三つの評価得点の平均値と標準偏差値を求め、tテスト法によって三群間相互の平均値の差の有意性検定を行った。

4. 結 果

各項目毎に、「大切さ」と「満足度」について3つの被調査群の平均値を比較したのが図1であり、「不満足」について同様な比較をしたのが図2である。これらの図の左側には、3群間の平均値の差の検定の結果、有意なものが表示されている。

被調査群相互の間には、第1表の上欄のようにIからVIIIまでの8通りの有意差の表われ方が考えられる。そこでこの表では、これらの分類に従い3種の評価それぞれについて有意な差の見い出された項目の数を示した。

5. 考 察

A. 全体的傾向

評価反応の全体的傾向として、先ず最初に被調査者三群間の相似性が指摘される。図1および図2に明らかなように、三つの被調査群が各領域内において極めてよく似たプロフィールを描いていることから、ここで質問されている「学生生活」の概念なりイメージの把握には、三群に高い一致度があり、ひいてはそれらの評価に高い信頼性のあることが推察できる。

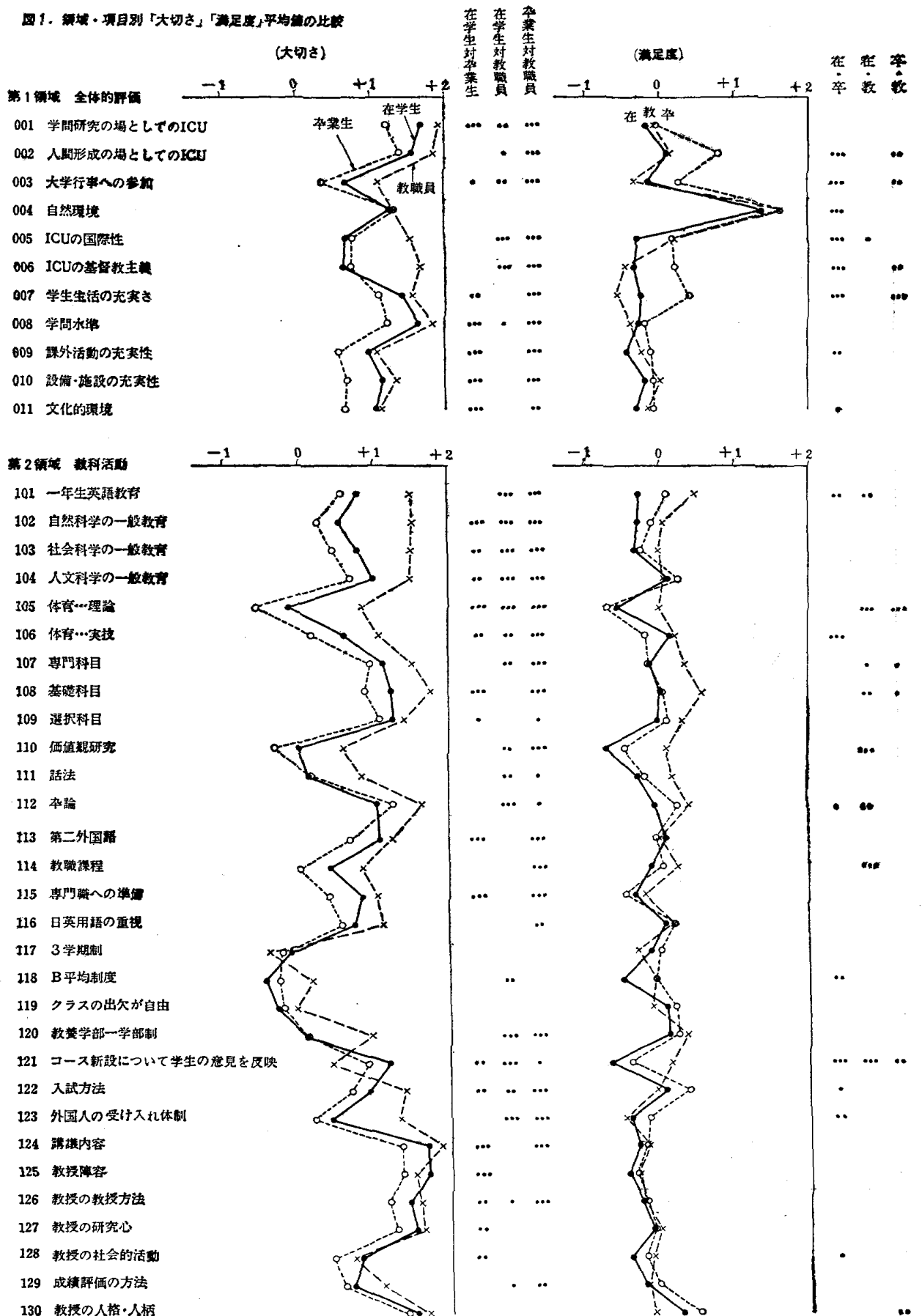
第二に、被調査群と領域の如何を問わず、わずかな項目をのぞき、ほとんどの項目において「満足度」が「大切さ」ほどには評価されていなく、よって総体的に「不満足」の高いことが示されている。

第三に、領域間の比較を概括すれば、「大切さ」に関しては領域1（全体的

第1表 被調査群間に有意差のある項目の数

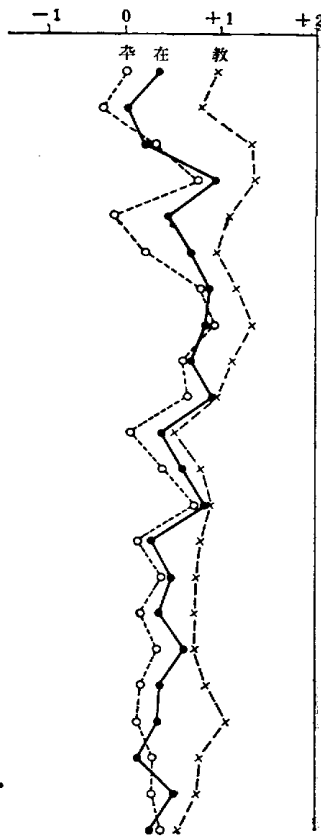
評価	領域	I 有意差 なし	有意差のある被調査群							計
			II 在・卒	III 在・教	IV 卒・教	V 在・卒 在・教	VI 卒・在 在・教	VII 教・在 教・卒	VIII 在・卒 在・教	
大切さ	1	1					4	3	3	11
	2	3	3	1	2		5	8	8	30
	3	3	2		1		4	8	4	22
	4	6		1				4	1	12
	5		3	1				5	2	11
	6	4	1				2	3	3	13
	7		1				4		1	6
	8	2	5		1		5	2	1	16
	小計	19(16%)	15(12)	3(02)	4(03)	0(0)	24(20)	33(27)	23(19)	121
満足度	1	3	3			1	4			11
	2	16	5	2	1	2		3	1	30
	3	6	9		2	1	2	1	1	22
	4	3	6			1	1		1	12
	5	2	8			1				11
	6	4	2		1	3	1	2		13
	7	2	1		1	1	1			6
	8	4	2			3	3		4	16
	小計	40(33%)	36(33)	2(02)	5(04)	13(11)	12(10)	6(05)	7(06)	121
不満度	1		4				5		2	11
	2	9	6		1		6	2	6	30
	3	2	2				9	6	3	22
	4	1			3		5	2	1	12
	5	1	2		1		4	2	1	11
	6	5	1			2	2	2	1	13
	7		2				3		1	6
	8	1	7			2	5	1		16
	小計	19(16%)	24(20)	0(0)	5(04)	4(03)	39(32)	15(12)	15(12)	121

図1. 領域・項目別「大切さ」「満足度」平均値の比較

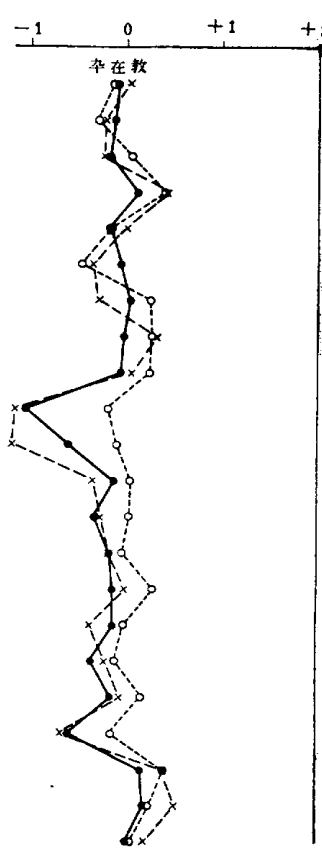


第3領域 課外活動

- 201 大学の広報活動
- 202 同窓会活動
- 203 宗教活動(礼拝)
- 204 コンボケーション
- 205 カンセリング・学生相談
- 206 就職指導
- 207 アドバイザー制度
- 208 経済援助制度
- 209 オリエンテーション
- 210 学生の自治組織・活動
- 211 新聞会
- 212 スポーツ・クラブ
- 213 研究サークル
- 214 美術系クラブ
- 215 音楽系クラブ
- 216 演劇系クラブ
- 217 思想・科学研究系クラブ
- 218 宗教関係奉仕グループ
- 219 SFC制度
- 220 入学式
- 221 オリエンテーション・キャンプ
- 222 IBS制度



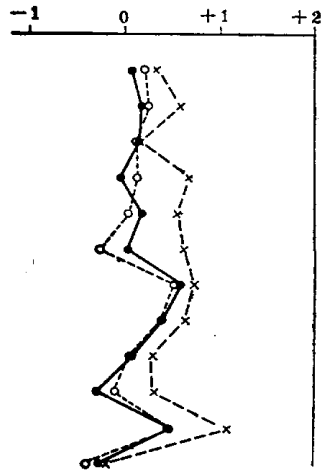
卒業	在教	卒業
•	•••	•••
•	•••	•••
•	•••	•••
•	••	•••
•••	••	•••
•••	••	•••
•	••	•
•	•	•
•	•	•
•	•	•••
••	•	•••
•	•	•
••	•••	•••
•	•••	•
••	•	•••
•••	•••	•••
••	••	•
••	•	•
••	•	•



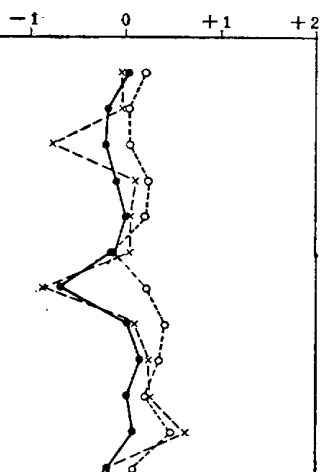
卒業	在教	卒業
•	•	••
•	•	•
•	•	•
••	•	••
•••	•	•••
•••	•	•••
•	•	•
•	•	•
•	•	•
•••	•••	•••
•••	•••	•••
•	•	•
••	•	•
•••	•••	•••
•	•	•
•••	•••	•
•••	•	•
••	•	•
••	•	•
••	•	•

第4領域 行事

- 301 祭
- 302 宗教強調週間
- 303 構内清掃日
- 304 修養会
- 305 夏期キャンプ
- 306 友達プログラム
- 307 ICU祭
- 308 クリスマス行事
- 309 スキー・キャンプ
- 310 マラソン大会
- 311 卒業式
- 312 舞踏会



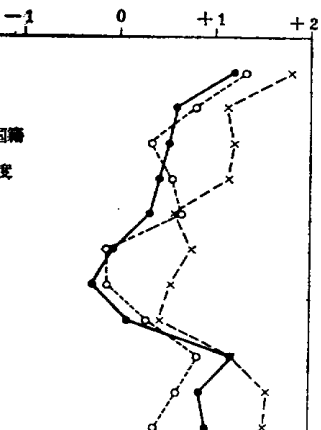
卒業	在教	卒業
•	•	•
•	•	•
•	•	•
•••	••	••
•	•	•
•	••	•••
•	•	•
•	•	•
•	•	•
••	•	•
••	••	••
•	•	•



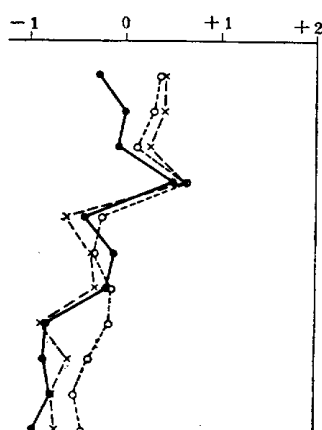
卒業	在教	卒業
•••	•	•••
•••	•	•••
•	•	•
•	•	•
•••	•••	•••
•	•	•
•	•	•
•	•	•
•	•	•
•	•	•
•••	•••	•••
••	•	•

第5領域 制度・特色

- 401 ICUの理念
- 402 教養学部4年制
- 403 学生の構成:性・宗教・国籍
- 404 1年生のセクション制度
- 405 全寮制
- 406 寮アドバイザー制度
- 407 寮母制度
- 408 ICUファミリー
- 409 学生の社会的関心
- 410 大学の経営方針
- 411 教授会の運営、あり方



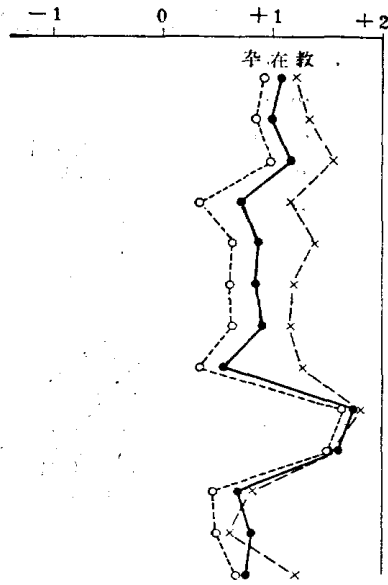
卒業	在教	卒業
•••	•••	•••
••	••	••
•••	•••	•••
•••	••	••
•	•	•
•	••	••
•	••	•
•	•	•
••	••	••
•••	•••	••
•••	••	•••



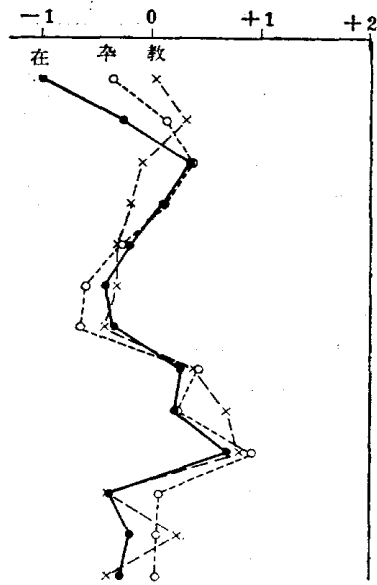
卒業	在教	卒業
•••	•	•
••	•	•
•••	•••	•••
•••	••	•••
•	•	•
•	••	••
•	•	•
•	•	•
••	••	••
•••	••	••
•••	••	•••

第6領域 設備・施設

- 501 食堂
- 502 クリニック
- 503 語学教育設備
- 504 視聴覚教育センター
- 505 実験設備
- 506 グラウンド
- 507 体育機具・施設
- 508 大学礼拝堂
- 509 図書館の設備
- 510 図書館の利用方法
- 511 社交の場
- 512 売店・床屋・靴屋、etc
- 513 寮の設備・運用



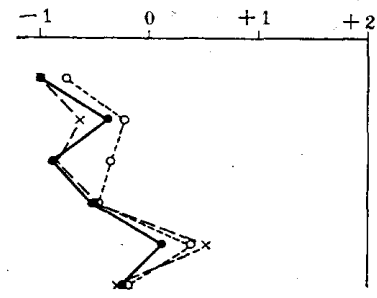
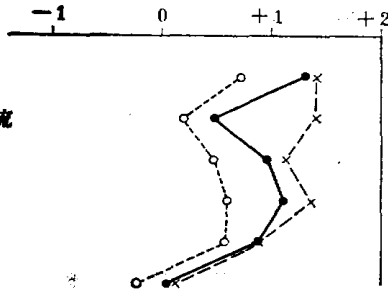
在 卒 在 卒 卒 在 在 卒 在 在 卒 在 卒 卒



在 卒 在 卒 卒 在 在 卒 在 在 卒 在 卒 卒

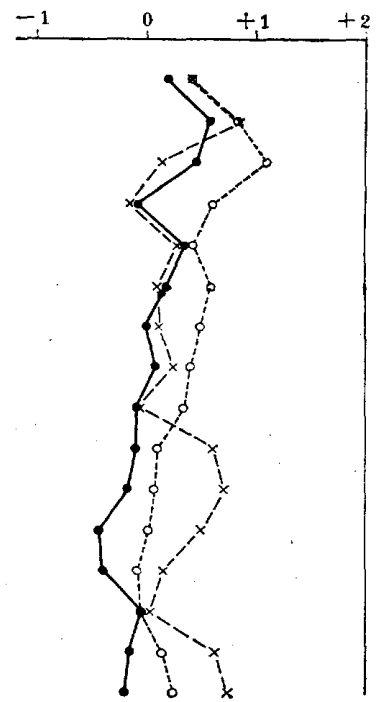
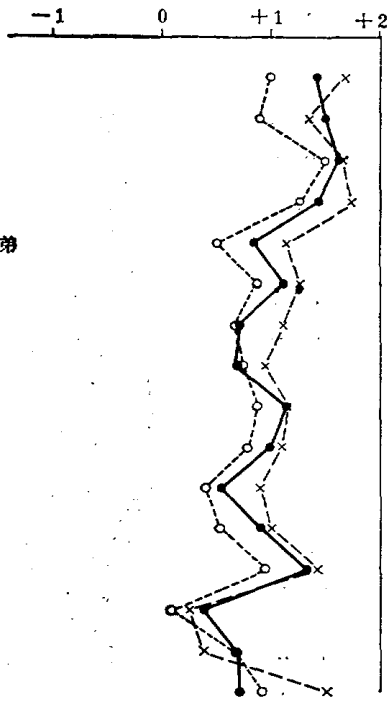
第7領域 文化的環境

- 601 他大学との学問的交流
- 602 スポーツ競技などの交流
- 603 文化面における交流
- 604 諸外国との交流
- 605 地理的条件
- 606 娯楽施設



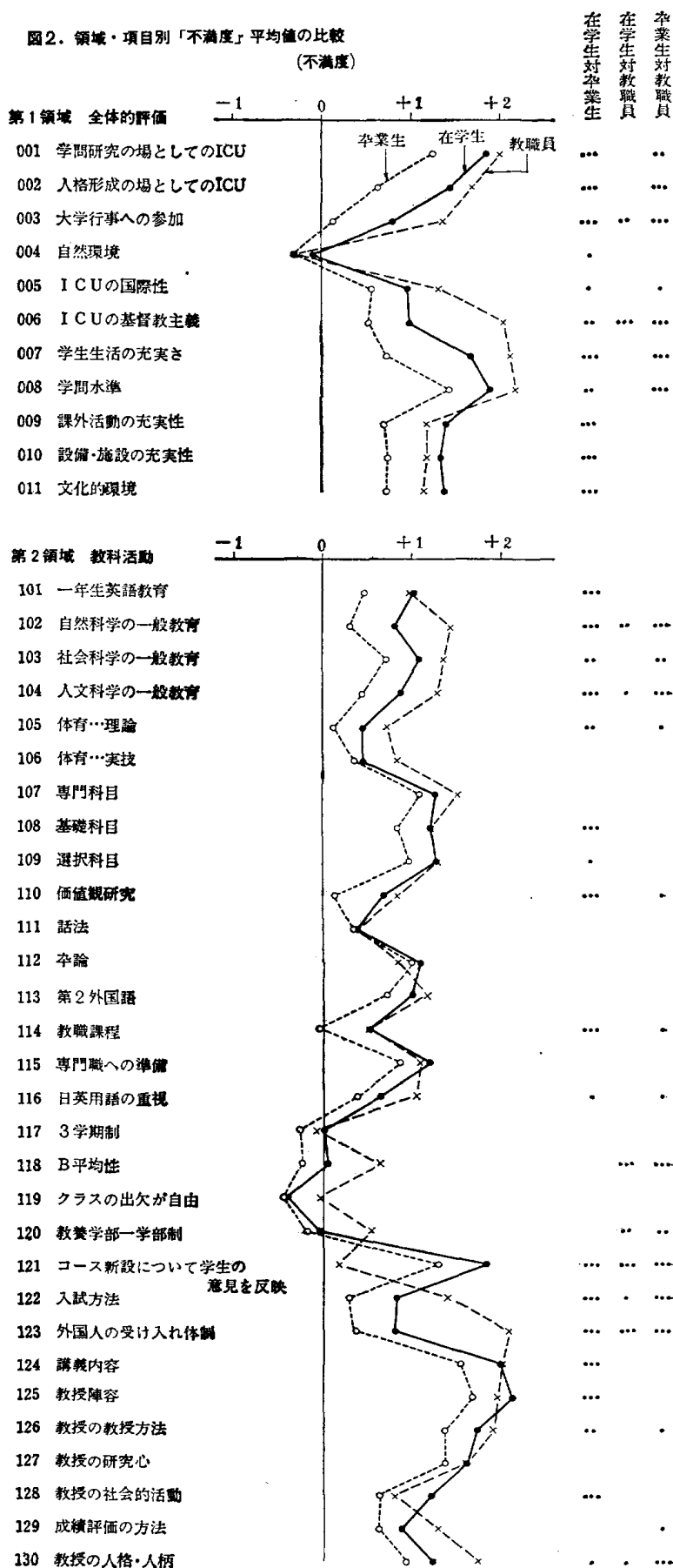
第8領域 日常生活

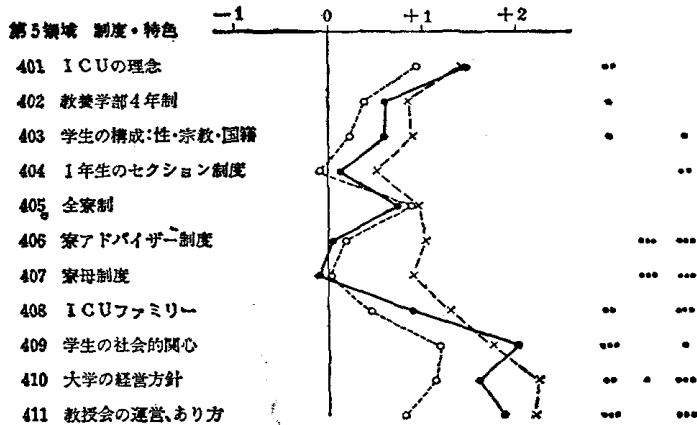
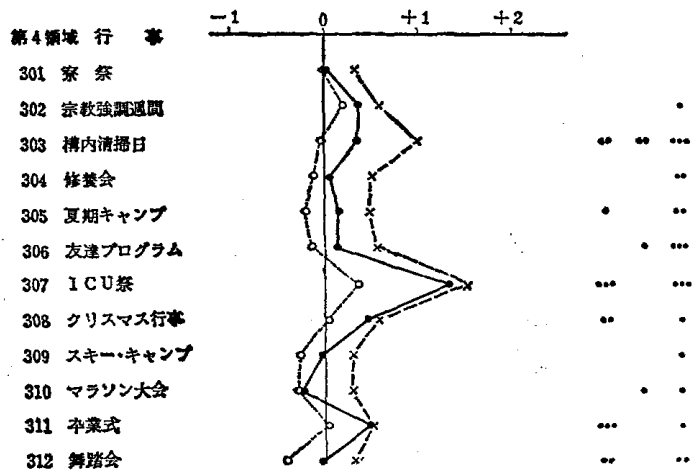
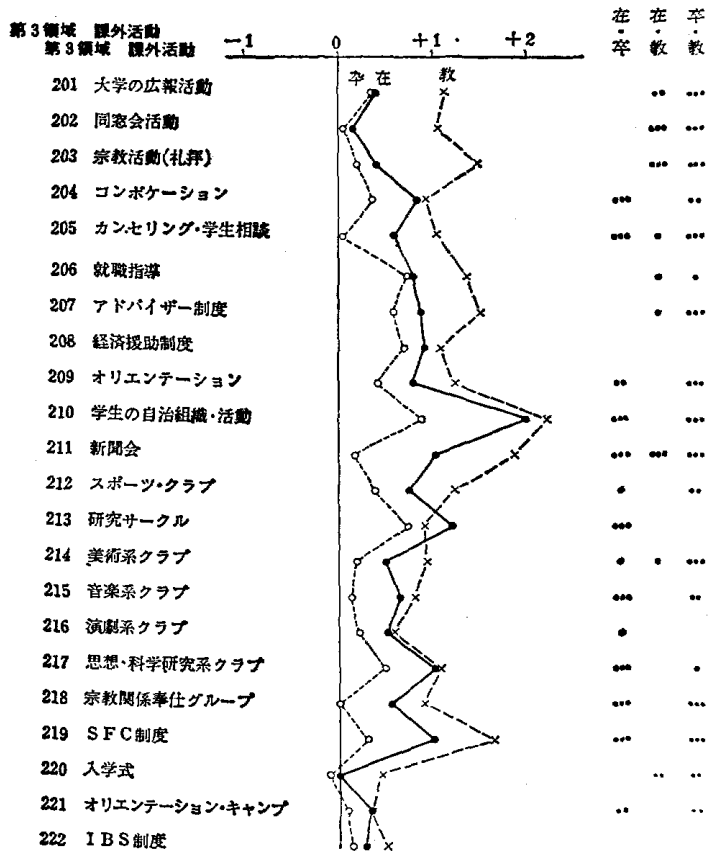
- 701 勉学の場
- 702 保健の場
- 703 人間的接触の場：友人
- 704 〃 教師
- 705 〃 親、兄弟
- 706 〃 先輩
- 707 〃 後輩
- 708 〃 異性
- 709 余暇の利用
- 710 授業料
- 711 寮費・下宿代
- 712 食費
- 713 書籍費
- 714 娯楽・交際費
- 715 アルバイト
- 716 奨学金

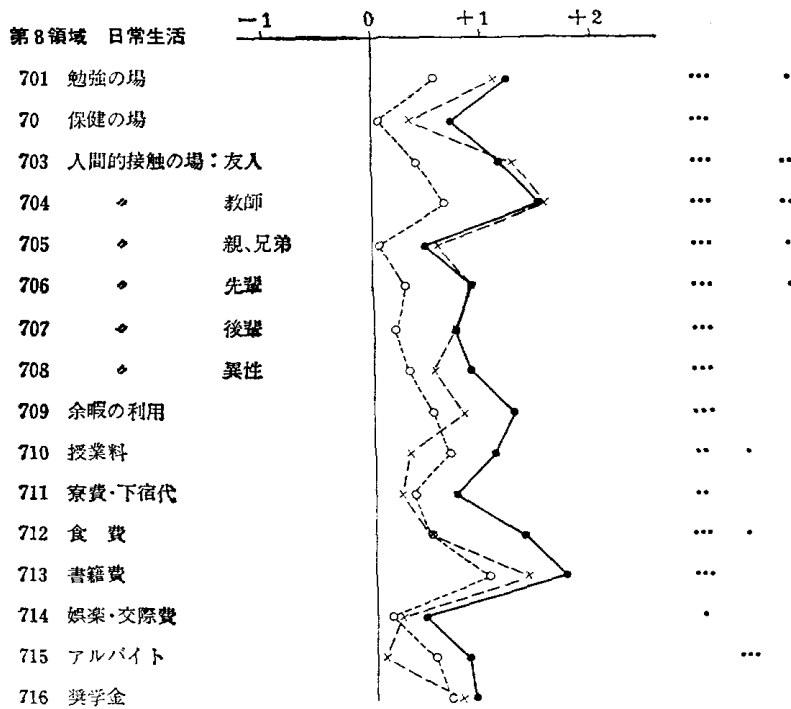
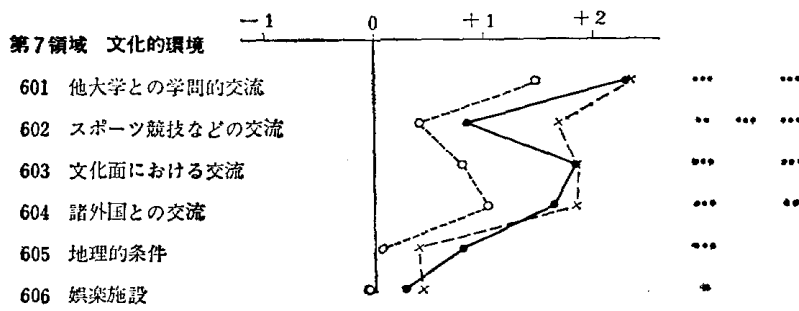
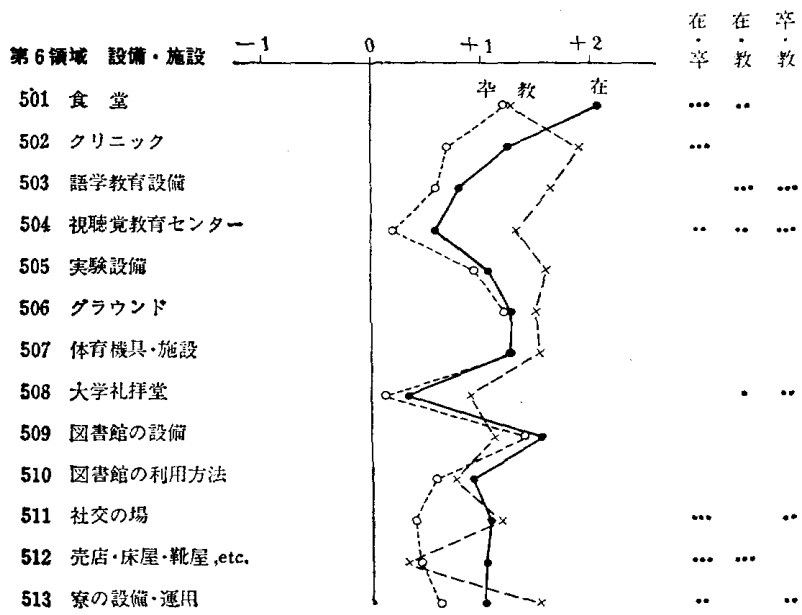


平均値 { —●— 在学生
 -○- 卒業生
 -x- 教職員
 有意水準 { ● .05
 ●● .01
 ●●● .001

図2. 領域・項目別「不満度」平均値の比較
(不満度)







平均値 {

- 在学生
- 卒業生
- × 教職員

 }
 有意水準 {

- .05
- .01
- .001

 }

評価), 領域 6 (設備・施設), 領域 8 (日常生活) の評価点が相対的に高く, 領域 4 (行事), 領域 7 (文化的環境) がやや低い。「満足度」では領域 8 (日常生活) が少し高い以外は, 多くは負の値を示し, 領域 7 (文化的環境) と領域 5 (制度) の中に特に低い項目が目立つ。これらの傾向を反映させて, 「不満度」においては領域 1 (全体的評価), 領域 5 (制度・特色), 領域 6 (設備・施設) と領域 7 (文化的環境) が不満の焦点となり, 領域 4 (学校行事) は他と比べてやや充足されていると言えよう。更に在学生群が領域 8 (日常生活) を不満としていることが特筆される。

全体的傾向の最後として, 三つの被調査群を比較してみると, ほとんどの場合「大切さ」では教職員, 在学生, 卒業生の順に並んでおり, 「満足さ」では卒業生に比べて在学生と教職員がより低く, 両者は大体同列に並んでいる。よって「不満度」は「大切さ」と同じ順序となり, 群間の差が更に拡大されて示されることになる。すなわち, 教職員に不満が最も多く, 他の二群と比べて卒業生の抱く不満は極めてわずかである。

B. 被調査群の比較

1) 群差の分類

三つの被調査群の間で有意な差を生む組み合わせ方には $7({}_3C_1 + {}_3C_2 + {}_3C_3)$ 種があり, 無群差を加えて 8 通りの分類が可能であるが, この調査においては「大切さ」, 「満足度」, 「不満度」それぞれに, 第 1 表のような項目数の分布が見られた。

先ず表中の分類 I, すなわち群間に差のない項目は, 「大切さ」と「不満度」に関しては総項目の 16% ずつであるが, 「満足度」では 33% も見いだされた。しかし, その他大部分の項目については何らかの群差が見いだされ, しかも評価の種類によって分布が甚だ異なっている。以下それぞれの評価について, 更に詳細に吟味したい。

2) 「大切さ」における群差

この評価において群間に有意差の表われた項目は分類の VI, VII, VIII に集中

している。しかも分類は前二者の合併と考えられ、「大切さ」に関しては、ほとんど総べてがVIとVIIの二つの型に含まれるとして考察できよう。

分類のIV型は、在學生群ならびに教職員群が卒業生群と評価を異にするものであり、このことは、現在ICUの学園生活を毎日体験している者と過去の記憶を基にして評価を行なった者との差が表明されると考えられる。図1より明らかなように、この型に属する項目の総べてが、卒業生群によって他の二群よりも低目に評価されているのは何故であろうか。その要因と考えられるものの幾つかを取り出してみたい。

卒業生群では、自分達が体験した学生生活を価値づけたいと思う記憶の合理化と、他方卒業後に実社会で学んだ実利的価値判断が大学教育の評価を逆に低める働きをなしていると考えられる。また教職員群と在學生群では、現今の世相を反映して刻々と変貌を遂げている学生生活の姿が実感として捕えられていると同時に、やはり学園外の世界に疎く、非現実的な理想主義的判斷に陥り易い傾向は避けられないものと考えられる。

これらの諸要因の内、いずれが重要かは一概に決めかねるが、本研究で有意な差の表われた項目を手掛りに推測を試みると、例えば、

- 007 学生生活の充実
- 008 学問的水準
- 009 課外活動
- 010 設備・施設
- 011 文化的環境

などのように、ここでは所謂大学教育一般に認められるべき点が指摘されている所から、二番目に挙げた卒業生のもつ社会体験に照らした現実的評価が強く働いていると考えられる。

分類のVII型は、教職員群に比べて他の二群が評価を異にしていることを示す。ここでは教育者と被教育者としての地位の違いが最も重要な要因と考えられる。すなわち、ICUへの心理的帰属の深さ、集団構成員となってからの期間の長短、あるいは年齢や世代の相違を超えて、教師と学生との立場の

差が映し出されている。これに該当する項目を幾つか取り出してみると、

- 005 ICUの国際性
- 006 ICUの基督教主義
- 101 一年生英語教育
- 120 教養学部一学部制
- 401 ICUの教育理念

などに代表されるように、本学の教育の基本的方針に関するものが多く、教職員（理事会、行政部）側の姿勢と学生側の受け止め方に価値意識の大きな断絶のあることを浮き彫りにしている。しかもこれらの項目は、筆者らの研究(5)で明らかにされたところの、学生の入学年度に従って一途価値評価が下降を続けている項目とよく一致している。

以上「大切さ」に関する群差を要約すると、在學生は教職員と同じく大学教育の一般的（通俗的）意義を認めながら、初期の卒業生と異り、ICU教育の独自性、ひいては本学の理念を軽視する傾向にあり、ICUにおいて学生生活を充実させたいと言う目的意識の背景に、在學生には教職員とは大層異なった価値の志向性が存在することを示している。

3) 「満足度」における群差

「満足度」から三群を比較してみると、群間の有意な差は分類のⅡ型とⅤ型に集中しており、共通して在學生群と卒業生群の評価が大いに異なることを意味している。しかも卒業生群の方がより多く満足しており、又領域 3, 4, 5 に比較的多く表われている。

この範疇には、

- 002 人格形成の場
- 006 大学行事への参加
- 007 学生生活の充実
- 307 ICU祭

などに代表されるところの、所謂ICUファミリー（408）的なものが圧倒的に多い。一方、予想に反し、在學生群と教職員群との間には有意差のある

項目が少なく、しかも指摘された問題点も技術的に割合容易に改善しうると考えられるようなものである。

4) 「不満度」における群差

本章1)で述べた通り、ほとんどの項目に対していずれの被調査群からも不満が表明された。ここで全群共通に「大切さ」以上に「満足」し、従って負の不満度を示した項目は、

- 004 自然環境
- 117 3学期制
- 119 クラスの出欠が自由

のわずか三項目に過ぎない。

「不満度」においては「大切さ」と同様、群間に多くの有意義がみられた。しかもそれらの項目が分類のⅡとⅥの型に集中していることは、在学生群と卒業生群との間と、在学生群に加えて教職員群と卒業生群との間に、不満度に対する大きな相違のあることを物語っている。

分類のⅡ型を代表する項目には

- 009 課外活動
- 002 設備・施設
- 007 文化的環境

などがあり、分類Ⅳ型には

- 001 学問研究の場としてのICU
- 002 人間形成の場としてのICU
- 007 学生生活の充実

以下多くの項目を挙げることができる。更に「満足度」と同様、在学生群と教職員群との間には左程の相違が見い出せないことにも注目すべきであろう。

6. ま と め

以上の結果から、次のことが推論できよう。教職員群と在学生群は、共に各自の持つ価値目標について、実践への具体的方策なしにただ目的意識のみ

を高揚すればするほど、「大切さ」と「満足度」との差は増大し、潜在的な葛藤、すなわち欲求不満を募らせる。もしこの緊張状態をそのまま持続させると、学園内の集団間に感情の摩擦を生み、攻撃的行動を生じさせるか、あるいは代償的 scapegoat を必要とさせる原因となりかねない。

過去においては、共通の目標が明確に認識されていたため、この欲求不満はかえって積極的な努力の原動力となり得たし、また他の領域における価値の充足で幾分とも補償できたであろう。しかし、現今の構成員の意識構造の中にはそのような価値が見出し難く、不満は益々増大し、何時顕在化するとも限らない危険な状態にある。しかも事態は一途険悪の度を深めているやに見受けられる。この時に当り、教職員、在學生、卒業生、更に理事会、後援者と父兄を含めた I C U 共同体の構成員全員は何をなすべきであろうか。以下課題の幾つかを列挙し、I C U 人の協力を求めてこの研究を終わりたい。

1. 集団に共通な価値志向の明確化。

“I C U 教育の理念”を構成員一人一人が自己の実践の拠所となしうるよう具態的に再定義する。(認知活動の活性化の問題)

2. 人格形成における価値志向の高揚。

個人の独自の動機体系の中に上記の共通価値を位置づけ、高次の動因に止揚し変容させる。(動機の機能的自律性の問題)

3. 価値の創造における個人の参加。

新しい状況において価値の再解釈を必要とする時、集団の構成員を意識的に参与させる。(自己関与の問題)

4. 構成員間の意志交流の奨励。

集団内外の情報活動を盛んにし、価値志向の多様性を承認し相互に尊重し、民主的に意志決定を行なう柔軟な態度を養う。(情報と説得の問題)

5. 集団的行動の力動性の理解と相互の承認。

各下位組織のもつ基本的価値態度を理解することによって、集団と

しての行動を予測する。(集団行動と凝集性の問題)

6. 欲求不満の早期解決。

個人ならびに集団に内在する情緒的葛藤の原因をつきとめ、集団紛争を回避する方法を見出す。(精神衛生の問題)

7. 総合的調査研究の必要。

長期に渡り継続的に教育活動の診断を行なう組織を作り、評価活動に構成員全員の参加を求める。(構成員参加による評価の問題)

参考文献

1. 原 一雄・渡辺幸一
“大学教育の総合評価 その1 大学における学校評価と国際基督教大学の
ための試案” 教育研究 14号 1969
2. 岩瀬純一
「大学生の学生生活に対する態度に関する一研究」 国際基督教大学 卒論
1968
3. 岩瀬純一・中山和彦・原 一雄
“大学教育の総合評価 その2 ICU在學生による学生生活の評価” 教育
研究 14号 1969
4. 土屋静子
「大学教育の教育評価に関する一考察」 国際基督教大学 修論 1969
5. 土屋静子・原 一雄
“大学教育の総合評価 その3 卒業生による学生生活の評価” 教育研究
15号 1970
6. 久留悠子
“学生生活の態度に関する評価の一研究：教職員と学生との比較研究” 国際
基督教大学 卒論 1969

追記：本調査の資料整理と統計的処理のために、本学計算機センターIBM1130を使用
できたことを、感謝をこめて付記する。

COMPREHENSIVE EVALUATION IN HIGHER EDUCATION

IV. Comparison of the students, alumni, and faculty and staffs on the evaluation of student life at ICU.

Kazuo Hara, Kazuhiko Nakayama, Yuko Hoshino, Junichi Iwase,
Shizuko Tsuchiya

Purpose

In concluding a series of evaluative study of the student life at ICU, the present study compared responses to a questionnaire obtained from 3 groups: undergraduate students, alumnus members, and faculty members and staffs. Specific aims of the study were as follows: (1) to find both common and different value orientations among the groups, (2) to analyze their conflicts produced from the gaps between their goals and their assessments of student life, (3) to diagnose psychological tensions among the groups and within the individuals, and (4) to explore the possibility of improving our educational activities.

Method

A questionnaire consisted of 121 items in 8 areas of student life (general impression, academic programs, extracurricular activities, university events, unique characteristics of ICU, facilities and equipments, cultural environment, and daily living) was distributed, and 197 undergraduate students, 133 alumni and 27 faculty members and staffs voluntarily responded.

Responses for those items were obtained on 5 point scales, separately indicating how much they were important and how much they were fulfilled.

Results and discussion

General trends observed hereby were as follows :

1. Three groups showed very similar response patterns in all areas.
2. The sense of satisfaction fell short of the sense of importance in all areas by all groups ; thus great degrees of dissatisfaction were manifested.
3. While the evaluation of importance were in the order of the faculty members and staffs, the alumni and the students, much higher satisfaction than others was shown by the alumni. Therefore, the faculty members and staffs manifested the most and the alumni the least dissatisfaction.
4. Assessments of the 'alumni were significantly lower than the other groups on those items representing the utility of higher education in general, but the faculty members and staffs evaluated the unique characteristics of ICU significantly higher than the others. Therefore, though the students appreciated secular values of higher education, they tended to ignore the goals and the uniqueness of ICU.

The facts hitherto described imply enormous psychological dis-sents both between those who are in the campus at present and who have left, and between those who are teaching now and who are studying or have studied in the same campus.

From the present study, we are able not only to reveal various

problems involved in our student life, but also to gain some insights for the directions which we should pursue our educational goals.

Some of those inevitable questions we are confronted are mentioned as follows :

1. Methods to clarify our common value orientations.
 2. Methods to practice the actualization of own values on campus.
 3. Methods to participate in decision making.
 4. Methods to enhance our communication.
 5. Methods to deepen our understanding of group dynamism.
 6. Methods to promote our community mental health.
 7. Methods to establish longterm comprehensive evaluation programs.
-

Acknowledgement :

Most of the data analyses and computations were conducted by the IBM 1130 of the ICU Computer Center.